



## ごあいさつ



東北大学 総長 吉本高志

本日、第3回東北大学男女共同参画シンポジウムを開催するにあたり、ご挨拶させていただきます。

東北大学男女共同参画委員会では、平成13年4月の委員会発足以来、男女共同参画推進のための諸活動を活発に行い、14年度は、第1回東北大学男女共同参画シンポジウムを開催して「男女共同参画推進のための東北大学宣言」を発表し、15年度は、その宣言にも掲げました「男女共同参画奨励賞（沢柳賞）」を創設して、同賞の第1回受賞者発表会を兼ねた第2回東北大学男女共同参画シンポジウムを開催致しました。

本日は、第3回東北大学男女共同参画シンポジウムを「現代日本社会とジェンダー」と題し開催いたします。このシンポジウムはまた、上記沢柳賞の第2回受賞者発表会を兼ねております。特別講演や受賞講演を通じて、現代の日本社会における現状を理解し、日本・世界の男女共同参画推進の課題等について、学内外の皆さまとともに考える機会をもちたいと存じます。

とくに本日の特別講演をお引き受け下さいました黒田玲子東京大学教授には、法人化後の東北大学経営協議会の委員を務めて頂いており、本学として大変お世話になっております。本日は「これからの科学技術と社会」というテーマでご講演頂きますが、実際今日では、科学技術の飛躍的發展のなかで、日本が中心的役割を果たすことが期待されております。日本がその期待に応えてゆくためにも、本来持っている才能が十分活かされる柔軟な社会、さらに、男女がともに性別にかかわらずその個性と能力を十分に発揮できる男女共同参画社会が実現されなくてはなりません。その実現に、本日の第3回東北大学男女共同参画シンポジウムが、寄与できることを祈っております。

平成16年11月20日

## プログラム

場所:東北大学川内地区マルチメディア教育研究棟

日時:平成16年11月20日(土)

13:30 開会宣言 東北大学 総長 吉本高志

沢柳賞 授賞式 (司会:医学系研究科 教授 大隅典子)  
 審査結果および講評 男女共同参画委員会 委員長 鈴木厚人

- 研究部門 教育学研究科 講師 李 仁子 氏  
 「在日コリアン二世・三世の見合い」  
 法学研究科 大学院研究生 田代亜紀 氏(特別賞)  
 「表現の自由とポルノグラフィー」
- 活動部門 情報科学研究科 博士課程後期3年 亀井あかね 氏  
 「ジェンダー等社会的不平等の問題に対する「知」の実践」
- プロジェクト部門 医学系研究科 教授 福土 審 氏  
 「ストレス関連疾患におけるジェンダーの影響」  
 文学研究科 博士課程後期3年 三隅多恵子 氏(特別賞)  
 「ドメスティックバイオレンスの個人的・社会的背景」
- プロジェクト部門 受賞者(2名) 受賞の言葉

14:00 受賞講演 (司会:法学研究科 教授 辻村みよ子)

- 「在日コリアン二世・三世の見合い」  
 研究部門受賞者 李 仁子 氏
- 「表現の自由とポルノグラフィー」  
 研究部門特別賞受賞者 田代亜紀 氏
- 「ジェンダー等社会的不平等の問題に対する「知」の実践」  
 活動部門受賞者 亀井あかね 氏

15:40▶16:00 休憩

16:00~ 特別講演 (司会:金属材料研究所 助教授 米永一郎)

- 「これからの科学技術と社会」  
 東京大学教授、内閣府総合科学技術会議議員、東北大学経営協議会委員  
 黒田玲子 氏

17:00 閉 会 鈴木 委員長

(総合司会:理学研究科 教授 小谷元子)

## 沢柳賞審査結果および講評



男女共同参画委員会 委員長 鈴木厚人

沢柳賞(東北大学男女共同参画奨励賞)の目的は、東北大学における男女共同参画の推進を目指して、教職員および学生のみなさんの男女共同参画に関連する研究や活動を奨励することです。賞の対象は研究部門、活動部門、プロジェクト部門の3部門からなり、審査においては、現在進行中またはこれから行なう予定の研究や活動の奨励、男女共同参画社会の実現に向けての提言や企画を重視しています。本年も昨年と同様に、公募により課題を募りました。その結果、研究部門に4課題、活動部門に2課題、プロジェクト部門に4課題の応募があり、これらに昨年の応募課題の中から審査委員会が推薦する課題を加えて審査いたしました。以下に受賞者と審査における課題の評価を記します。

### ◇研究部門賞:「在日コリアン二世・三世の見合い」

教育学研究科・講師 李 仁子

移住者である在日コリアンの二世・三世にあたる女性の結婚を取り巻く環境を文化人類学的に追究し、何層もの克服しなければならない障害があることを提示。

### ◇研究部門特別賞:「表現の自由とポルノグラフィ」

法学研究科・大学院研究生 田代 亜紀

ポルノグラフィ規制に係わるリベラリズムとフェミニズムの深刻な対立構図を、表現の自由の問題と、憲法解釈上におけるジェンダー問題を考慮して両者に潜む課題を提起。

### ◇活動部門賞:「ジェンダー等社会的不平等の問題に対する「知」の実践」—学会と市民の橋渡しを目指して

情報科学研究科・博士課程後期3年 亀井 あかね

既存のジェンダー研究の枠組みにとらわれず、社会科学・自然科学の横断的な取組みにより、課題を追究する姿勢、さらに、研究において蓄積される「知」を実際の問題に直面する市民に還元する姿勢の重要性を指摘。

### ◇プロジェクト部門賞:「ストレス関連疾患におけるジェンダーの影響」

医学系研究科・教授 福土 審

病的疾患に対して、患者の心理社会的側面を分析して、治療にあたることの重要性が指摘されている。そのために、個性のみならずジェンダーの差異を明瞭に分析して治療に応用することを実践。

### ◇プロジェクト部門特別賞:「ドメスティックバイオレンスの個人的・社会的背景」

文学研究科・博士課程後期3年 三隅 多恵子

都市部と農村部のドメスティックバイオレンス被害者女性への聴取調査により、ドメスティックバイオレンスのメカニズムを社会的、ジェンダー学的に多面的分析を試行。

## 沢柳賞・受賞者

研究部門



### 在日コリアン二世・三世の見合い

教育学研究科 講師 李 仁子 氏

#### 【略歴】

百済の都・扶余(ぶよ)に生まれ、大学卒業までは韓国で過ごし、日本に留学。京都大学大学院に文化人類学コースが新設されると同時に入学。在日韓国・朝鮮人(コリアン)が日本に建立する墓に注目し、彼らの人生や想いをそこに読みとりながら、修士論文を書き上げる。その後、在日の集住する東京都荒川区に調査のため住みこむ。そこで出会った年老いた在日一世たちの強い郷愁、死後の環境整備への熱意に触れ、在日独自の葬送儀礼(生葬)の研究や、韓国の故郷に作られる共同墓地の調査を行い、博士論文を完成させる。平成12年4月より現職。日本人の夫との間に3歳の男児あり。

#### 【講演の内容】

今回の講演は、移住者の子孫であり、日本で生まれ育った在日コリアンの2世、3世の女性たちの「結婚」を取り巻く環境を文化人類学的手法で描き出すものです。移住するだけで人は、その移住先でマイノリティー(少数派)となり、様々な差別や抑圧を経験するものですが、中でも女性は、女性であるが故に、よりいっそう厳しい状況に置かれがちです。マイノリティーの中のさらなるマイノリティーである移住者の女性には、自分らしく生きていくために何層もの乗り越えなければならないハードルがあることを、彼女らの結婚問題を通してお話できればと思っています。

#### 【主な研究】

- 「異文化における移住者のアイデンティティ表現の重層性 —在日韓国・朝鮮人の墓をめぐる—」『民族学研究 61-3』 393-422頁 1996年
- 「移住する「生」、帰郷する「死」」『講座・人間と環境7 死後の環境 —他界への準備と墓』新谷尚紀編著、昭和堂 154-183頁 1999年
- 「移住一世の「故郷」づきあいの風景」『講座・人間と環境8 近所づきあいの風景 —つながりを再考する』福井勝義編著、昭和堂 22-56頁 2000年
- 「移住者の「故郷」とアイデンティティ —在日済州道出身者の移住過程と葬送儀礼からみる「安住」の希求—」(京都大学大学院人間・環境学博士論文) 2001年
- 「脱北女性たちの移住先での定着とジェンダー」『東北大学21世紀COEプログラム「男女共同参画社会の法と政策 —ジェンダー法・政策研究センター」研究年報1』COEプログラム「男女共同参画社会の法と政策」出版委員会(編) 123-132頁 2004年

## 沢柳賞・受賞者

研究部門特別賞



## 表現の自由とポルノグラフィ

法学研究科 大学院研究生 田代 亜紀 氏 (特別賞)

## 【略歴】

1976年生まれ、1999年千葉大学法経学部法学科卒業、2001年早稲田大学法学研究科修士課程修了、2004年9月東北大学大学院法学研究科博士後期課程修了。10月より同研究科研究生。

## 【主な著書】

- ・「『表現の自由』とポルノグラフィ」憲法理論研究会編『憲法と自治』所収(2003年、敬文堂)
- ・「ポルノグラフィをめぐる議論—その憲法学的考察」東北法学21号(2003年)
- ・博士論文「『表現の自由』論におけるリベラリズムとフェミニズムの対話可能性」(未公刊)

## 【講演要旨】

ポルノグラフィは非常に複雑な問題を孕んでいる。それは、一方では憲法上重要な人権とされる「表現の自由」により産み落とされたものであり、他方ではフェミニストにより性支配構造を体現するものとして糾弾される。この二方向の議論が、ポルノグラフィを規制するか・しないかを論じる際の根底にある。

この問題は「表現の自由」という近代的権利に潜むジェンダーの問題とも言えるが、ここでは人権の解釈にフェミニストの視点を如何に取り入れるか、が問われている。ポルノグラフィの問題を素材にすることで、人権の普遍性への疑義、すなわち、女性是人権を実質的に享有する主体となり得ているか、女性の主張を人権解釈の場に如何に取り入れるか、を考えたい。

## 沢柳賞・受賞者

活動部門



## ジェンダー等社会的不平等の問題に対する「知」の実践

～学界と市民の橋渡しをめざして～

大学院情報科学研究科 社会経済情報学講座 博士課程後期3年  
Association for Gender Issues in Academia (AGIA:ジェンダー研究会) 代表  
亀井 あかね 氏

## 【略歴】

東北大学大学院情報科学研究科・社会経済情報学講座・博士課程後期3年次在学中。主な研究テーマは、人的資本・教育の経済学。現在、開発途上国における人的資本形成に関する教育投資の経済発展効果について研究中。

## 【講演要旨】

## 1. AGIA設立の経緯

近年、ジェンダーの視点は一般社会において、不可欠なものとなっています。ジェンダーに関わる問題について、批判性を維持しつつも、さらなる一般性を持ち、実践につなげるには、他の社会科学や自然科学の成果を取り入れ、広く検討されねばなりません。そこで、<AGIA:ジェンダー研究会>は、性別に中立な立場で社会構造を見直し、学界における横断領域的研究の活性化と当該研究成果の一般社会への還元を目指し、大学院生が中心となり、平成15年6月2日に発足致しました。

## 2. 活動履歴

平成15年度は、7月よりワークショップを毎月開催し、既存のジェンダー研究の枠組みにとらわれず、社会科学・自然科学の横断領域的なアプローチを用いて、包括的・多面的な「知」を蓄積することに努めました。また、社会との相互交流を通じた問題意識の活性化と、研究成果の還元を目指した社会活動の一環として、11月に仙台市内に於いて一般参加者を交え、「男女共学化」を考える—ジェンダーと教育の公共性—をテーマに談話会を開催致しました。

平成16年度は、毎月のワークショップ開催の他、これまでのワークショップの成果を元に、主に東北大学大学院生がシンポジストを務める「知」の市民還元を目的とした4回シリーズのシンポジウムを、「情報化社会における人間行動」をテーマに、仙台市内に於いて開催致して参りました。シリーズ最終のシンポジウムは11月28日に開催致します。また、シンポジウムの内容については、月毎に報告冊子を作成し、平成17年に発行予定です。

## 3. 今後の活動および課題

平成16年12月13日、鳥根県浜田市に於いて、「ジェンダー・家族の変化からみる地域社会」と題して、「女性の就業」をテーマにシンポジウムを開催致します。また、開催日程は未定ですが、現在学術シンポジウムを企画中です。人文科学・社会科学の各分野の第一人者に登壇いただき、社会の現状分析の実証・理論と、あるべき原理的課題としての規範、またそれらが交錯する結節点としての教育制度・政策と、これらを含む歴史的観点から、ジェンダーと教育のかかわりについて、各分野の成果に基づいて、将来を展望したいと考えております。

平成17年度以降も既存の活動(ワークショップ・シンポジウム・談話会の開催)を継続し、学際的なアプローチを用い、より包括的・多面的な「知」を蓄積することに努める所存です。平成17-18年の主要な活動としては、会員の研究成果を纏めたジャーナルの刊行を予定致しております。

現在<AGIA:ジェンダー研究会>は大学院生を主体とする学術団体である為、組織のライフサイクルを予見し難いという運営上の課題がございますが、組織変動の動因(環境要因と内部要因)はもとより、急激な変化過程と漸進的な進化過程をともに考慮し、「市民にfeedbackする学術団体」としての確立を目指して参ります。

<AGIA:ジェンダー研究会>の活動日程はホームページ上で公開致しております。 <http://agia.info>

## 沢柳賞・受賞者

プロジェクト部門



### ストレス関連疾患における ジェンダーの影響

医学系研究科 教授 福土 審 氏

#### 【略歴】

1983年東北大学医学部医学専攻卒業  
1987年東北大学心療内科助手、米国・デューク大学医学部行動医学留学  
1998年東北大学医学部附属病院心療内科助教授  
1999年東北大学大学院医学系研究科人間行動学教授(行動医学に名称変更)  
2000年東北大学医学部附属病院心療内科兼担  
日本心身医学会石川記念賞、アメリカ心身医学会Early Career Award受賞、機能性消化管障害国際Rome III委員会委員

#### 【著書】

・ストレス・心身症研究の進歩(脳科学研究の現状と課題、じほう、2003)

#### 【概要】

21世紀に生きるわれわれの社会活動を最大限に有効にするためには、ヒト一人一人の個性を考慮するとともに、これを尊重する気運を社会全体で高める必要がある。21世紀の医学医療においてはこれがさらに重要である。このような考え方を生物(バイオ)-心理(サイコ)-社会(ソーシャル)モデルと呼ぶ。患者を生物の集団として捉え、平均値がどのように変動するかという問題のみならず、患者の心理社会的側面を分析し、患者一人一人の生活の質を考慮する医療を理想とし、個性を科学的に分析する。個性は数多くの因子からなるが、ジェンダーの相違は、その重要性にも関わらず、これまであまり考慮されて来なかった。最近、ジェンダーの差異を明瞭に分析し、治療においてもこれを応用する試みがなされている。代表的ストレス関連疾患の過敏性腸症候群(irritable bowel syndrome: IBS)はその代表である。IBSは男女比が1:2から1:3と女性に多い。セロトニン遮断薬アロセロンはIBSの女性にのみ有効である。これらの理由は依然として謎である。本プロジェクトでは、IBSの病態の発現にセロトニン・トランスポーターの遺伝子多型が関与し、これが男性と女性で相違するという仮説、消化管へのストレス反応に男女差があるという仮説、ならびに、女性ホルモンのエストロゲンとプロゲステロンの量により、IBSの病態が左右されるという仮説を検証する。以上により、ジェンダーを考慮した医学の科学的根拠の一つとしたい。

## 沢柳賞・受賞者

プロジェクト部門特別賞



### ドメスティックバイオレンスの 個人的・社会的背景

文学研究科 博士課程後期3年 三隅 多恵子 氏

#### 【略歴】

1999年米国カリフォルニア州立サンホセ大学大学院社会学専攻卒業 修士号取得  
現在、東北大学大学院文学研究科行動科学専攻博士課程後期に在籍

#### 【主な著書】

Misumi, Taeko, 1999, The Awareness of Domestic Violence Among Japanese Americans in the Bay Area, MI: UMI.  
三隅多恵子、2002、「農村におけるドメスティック・バイオレンスに関する意識・実態」『日本＝性研究会議会報』14(1): 14-22.

#### 【プロジェクトの概要】

本研究者のプロジェクトは、最小単位の「社会」として「家族」に焦点を当て、家庭内で発生・継続する女性の人権が最も無視される事象、すなわち、夫の妻に対する暴力、夫婦間で起こるドメスティック・バイオレンス(DV)のメカニズムを社会的に分析し、その「家族」内構造を通して現在の「社会」を捉え直し、男女共同参画社会推進への貢献を願うものである。

本研究者は女性内の差異に注目し、DV研究においてあらゆる女性を包括することが重要であると考え、異なる地域(都市部と農村部)のDV被害者女性を対象とした聴取調査を丁寧に行う。単に調査データを用いた計量的な分析による傾向を捉えるのみでは見えてこないDVの背景を綿密に探究する。

## 平成15年度 沢柳賞受賞者

部門・受賞者・受賞課題	備考
<b>リサーチ部門</b> 文学研究科 講師 田中 重人 氏 「階層論の枠組による性別格差と平等政策の研究」	副賞 奨励金40万円
<b>エンパワーメント部門</b> 星陵地区病児保育施設運営委員会代表 根本 建二 氏 「星陵地区における病児保育施設の運営について」	医学系研究科 講師、 副賞 奨励金40万円
<b>プロジェクト部門</b> 教育学研究科 助教授 小川 佳万 氏 「高大連携による女子高校生の理数科教育サポート計画」	共同研究者: 教育学研究科教授 荒井克弘、 教育学研究科博士前期課程 今野真希 副賞 奨励金50万円
<b>プロジェクト部門 特別賞</b> 経済学部3年生 勝又 梨穂子 氏 「ウイメンズ・リブ、フェミニズム、男女共同参画 一仙台地域の事例を中心に」	副賞 奨励金10万円

※プロジェクト部門受賞者は、第4回男女共同参画シンポジウム(17年度)にて成果報告講演を行う。

## 特別講演



## これからの科学技術と社会

東京大学大学院 教授 黒田 玲子 氏

## 【略歴】

東京大学大学院総合文化研究科教授・総長特任補佐(研究担当)  
内閣府総合科学技術会議議員(非常勤)、文部科学省中央教育審議会委員、経済産業省参与、東北大学経営協議会委員など  
お茶の水女子大学理学部化学科卒業、東京大学大学院理学系研究科化学専門課程修士及び博士課程修了(理学博士)。ロンドン大学キングスレッジ化学科、生物物理学科に、博士研究員、後にオナラリー・レクチャーとして勤務。英国がん研究所 senior staff scientist を経て、1986年に東京大学教養学部助教授、1992年に教授。1996年から現職。専門は生物物理学。DNAの塩基配列認識機構を構造化学的、分光学的、分子生物学的に研究。また、生物界・非生物界においてマイクロからマクロのレベルまで現れるカイロモルフォロジー(左右非対称な形態)に着目し、固体状態の化学、固体・ゲル状態などのキラリティーも測定できる分光装置の開発、タンパクの凝集過程の研究、さらに巻貝の巻型決定機構の分子レベルでの研究にも従事。1993年『非対称な分子の左右やDNA塩基配列の識別の仕組みの研究』で第13回猿橋賞、1994年『光スイッチを持ったインテリジェント化合物の開発』で第1回 日産科学賞、2003年固体状態のキラリティーの化学と分光学への貢献に対してモレキュラー・キラリティー・アワードを受賞。現在、科学技術振興機構創造科学技術推進事業「黒田カイロモルフォロジープロジェクト」の総括責任者を務める。

## 【主な著書】

『科学を育む』、中公新書、中央公論新社、(2002)  
『生命世界の非対称性』、中公新書、中央公論社、(1992)

## 【分担執筆】

「親愛なるマリー・キュリー」東京書籍(2002)  
[my life] 内田老鶴圃(2001)  
『バイオサイエンスで健康を考える』丸善(1994)  
『結晶の分子科学入門』講談社サイエンティフィック(1989)  
『日本人の科学』現代日本文化論13(河合隼雄・佐藤文隆編)岩波書店(1996)  
『化学のすすめ』21世紀学問のすすめ6(濱口宏夫・黒田玲子・永田敬)、筑摩書房(1997)など

## 【訳書】

『ペルツ タンパク質:立体構造と医療への応用』東京化学同人(1995)  
『マイケル ファラデー』東京化学同人(共訳)(1995)  
『ゆかいな生物学』マグロウヒル、1-340(1991)、(原著:Professor Farnsworth's Explanation in Biology, F.H. Heppner, McGraw-Hill, Inc. 1990)  
『教養の化学』東京化学同人、1-522(1989)、(原著:Chemistry in Perspective, J.R. Mohrig and W.C. Child, Jr., Allyn and Bacon, 1987)

## 【講演要旨】

人類の歴史の上で20世紀ほど科学が急速に発展し、科学技術の多様な産物が花開いた時代はなかった。科学技術の発達によって、いったいどれだけの不可能が可能になったのだろうか。また、これまで謎に包まれていた事象の因果関係がどれほど明らかになったのだろうか。しかし、未だ解明されていない謎がまだまだたくさんある。生命とは何なのか、どうやって誕生したのだろうか? 宇宙の起源は? 目に見えないナノの世界がどのようにして生命現象や様々な自然現象を担っているのだろうか? これらの不思議は心をワクワクさせるものである。21世紀は、これらの解決にいつそう挑戦して行くであろう。

科学技術の発展は、私たちにさまざまな恩恵を与えてきた。高速の交通手段、電子レンジ、インターネット、病気の新しい診断法や治療法と例をあげればきりが無い。だがその一方で、過去数十年の科学技術の進歩はあまりにも速く、人間社会との間に軋轢を生じてきている。地球の歴史、生物進化の中で出現してきた人類のひとりとしての自分、宇宙、地球、生態系の中の自分という、時間・空間軸の中における自分という視点がこれからますます重要になってくるだろう。我々は目で見える自分の身の回りのことだけを考えてはいけなくなっている。そんな時代を生きる私たちは、科学とは何か、それは私たちに何を教え、何を与えてくれるのか、そして科学の一人歩きに対して社会は何をなすべきかと、あらためて問う時期を迎えているのではないだろうか。

こんにち、フロンティアの学問を切り拓き技術を開発する研究者・技術者、科学的ものの考え方のできる賢い一般市民、そして両者をつなぐ社会と科学を双方向的に結びつけるインタープリターが重要になっている。これらの3つの役割すべてにおいて、女性の活躍が期待されている。本日の講演では、これからの科学技術と社会の観点から、女性の活躍にもふれてみたい。

## 東北大学男女共同参画委員会活動報告

男女共同参画委員会 副委員長 辻村 みよ子

## 1 東北大学男女共同参画委員会の活動

東北大学男女共同参画委員会は、本学における男女共同参画を促進するため、平成13年4月に設置されました。副総長を委員長とし、委員20名(うち9名が女性教官)からなる同委員会は、部局長や全教職員を対象としたアンケート調査・広報活動・ジェンダー教育の振興・相談窓口の設置等を任務とし、平成14年3月に報告書「東北大学における男女共同参画推進の方針に関する提案」を提出して13項目の提言を行いました。その第1項目で提案された東北大学主催のシンポジウムが、「第1回男女共同参画シンポジウム:学問・教育と男女共同参画」と題して同年9月28日に開催され、当時の阿部博之総長より、「男女共同参画推進のための東北大学宣言」が発表されました。この宣言は、男女共同参画奨励賞(沢柳賞)の創設、研究・労働環境の改善、不服申立・救済制度の設置などの方針を確認し、「東北大学が全国の大学の先駆となるべく、率先して」推進することを明らかにしたものです(後掲参照)。これは、マスコミでも注目されただけでなく、翌年の内閣府男女共同参画会議基本問題専門調査会報告書『女性のチャレンジ支援策について』にも掲載され、大学における先駆的取組みとして広く知られることとなりました(内閣府男女共同参画局編『共同参画21』2003年1月号、文部科学省『大学と学生』2004年3月号などでもその取組みが紹介されました)。平成15年度には、従来の3つのワーキンググループ(実態調査・広報・相談窓口WG)に加えて、両立支援・奨励賞(沢柳賞)、中期目標・提言等を担当する3つのWGを新設して取組みを強化し、奨励制度WGを中心に第1回沢柳賞受賞者を決定して第2回東北大学男女共同参画シンポジウムで授賞式を行いました。また、実態調査WGでは、部局長・全教職員対象アンケート、非常勤職員対象アンケートに続いて全学生を対象とした意識調査を実施し、結果を公表しました。両立支援WGでは学内保育園の設置実現に向けて活動を続けています。

このように、東北大学男女共同参画委員会は、発足以来積極的な活動を行い、このたび平成16年度の第3回東北大学男女共同参画シンポジウムで、第2回沢柳賞授賞式を実施することができました。しかし、法人化後の東北大学にとって、男女共同参画の現状、とくに女性教員比率が全国立大学のなかでも非常に低い位置にある現状をどのように改善するか、という問題はなおも切実な課題であり続けています。(下記のグラフに示されるように女性教員は微増にとどまっています)。本学の男女共同参画を推進し、女性教員比率を高めるためにも、研究・教育環境の改善や大学院・学部学生等の女性比率の増加にむけて、多くの障碍を克服しなければなりません。

周知のとおり、本学は、1913年(大正2年)に、全国に先駆けて女子に帝国大学の門戸を開いたという輝かしい伝統を持っています。この伝統を受け継いで、本学が男女共同参画の側面においても全国をリードするような成果がえられるように、本委員会や各部局の男女共同参画ワーキンググループを中心に、今後も積極的に取り組む所存です。どうぞ皆様の一層のご支援・ご協力をお願いいたします。

## 2 男女構成比

東北大学の教官、学生、職員の男女構成比について調査致しました。図1~図3は教官、学生、職員の男女構成比です。図1から教官の各職位の男女構成比については、助手をのぞいた講師以上では職位が上位であるほど女性の比率が減少している様子が分かります。教官全体に関しては男性92.9%、女性7.1%で合計2,604人です。図2から学生に関しては、学年による女性比率の変動は少なく、外国留学生学生(研究生等の非正規生を含む)に関しては女性の比率が高いこと

が分かります。学生全体に関しては男性78.5%、女性21.5%、合計17,538人で構成されています。図3の職員男女構成比については、職種によって女性の比率が大きく異なり、職員全体においては、男性、女性はほぼ50%で合計2,365人です。また過去約10年の女性の教官及び学生の比率の推移を図4に示しています。10年前に比べると微増の傾向で推移していると考えられます。

図1) 教官男女構成比(平成16年10月1日)

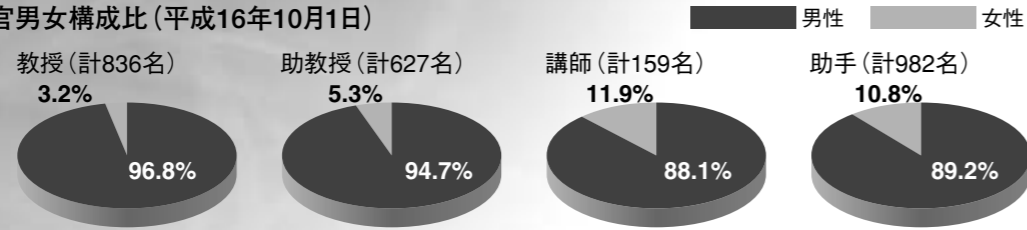


図2) 学生男女構成比(平成16年5月1日)

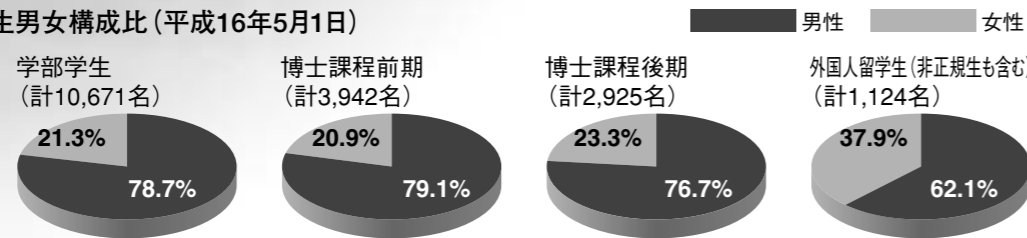


図3) 職員男女構成比(平成16年10月1日)

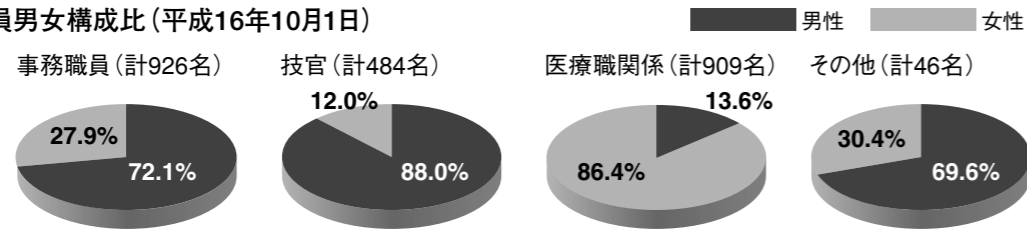
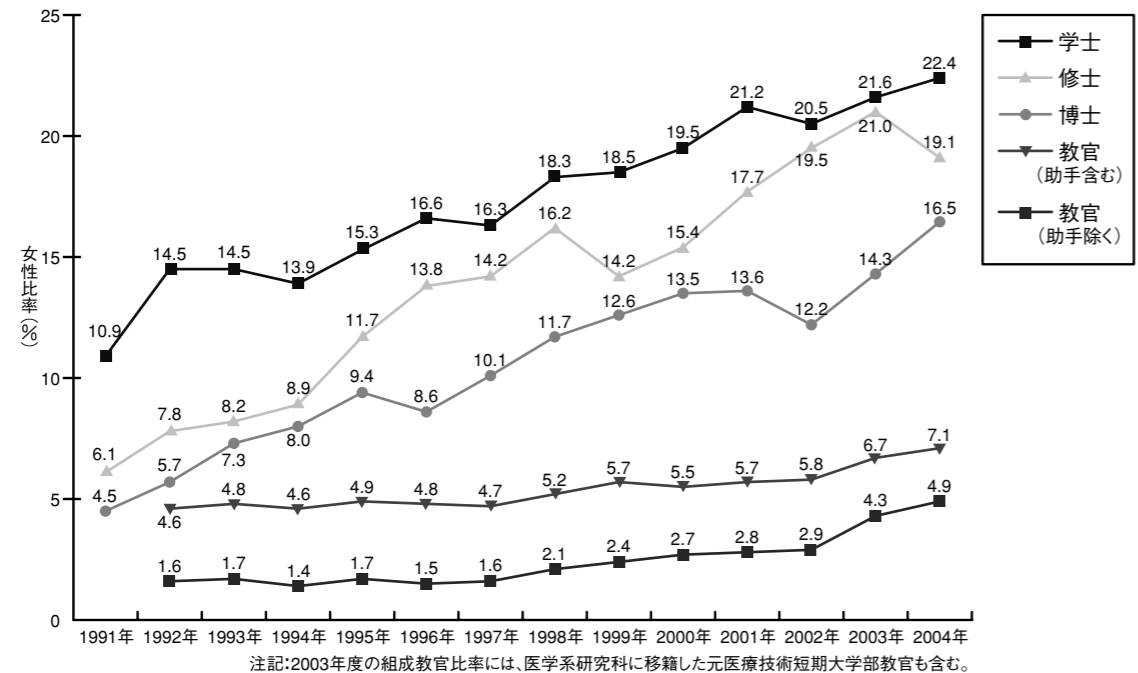


図4) 男女教官・学生(卒業生・修了者)推移

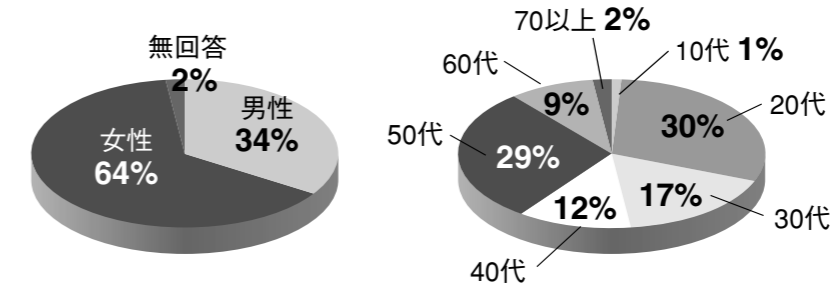


第2回 男女共同参画シンポジウム アンケートまとめ

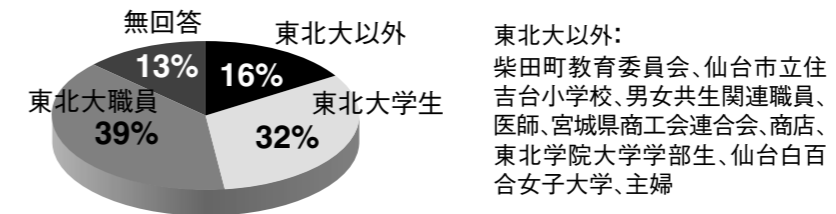
2004年1月 広報WG

約160名の参加で、82名の方からアンケートの回答が寄せられた。

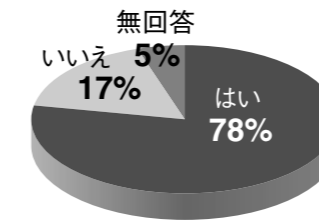
Q1 あなたの性別と年齢をお教え下さい。



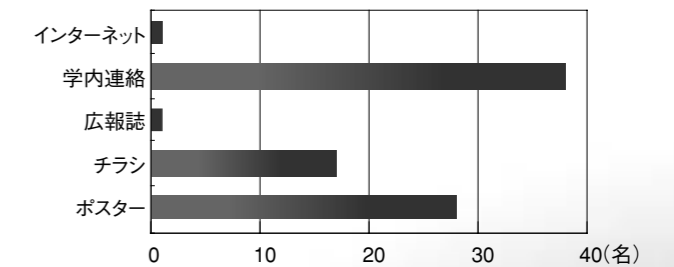
Q2 職業と、もしよろしければ、会社名、職名等もお教え下さい。



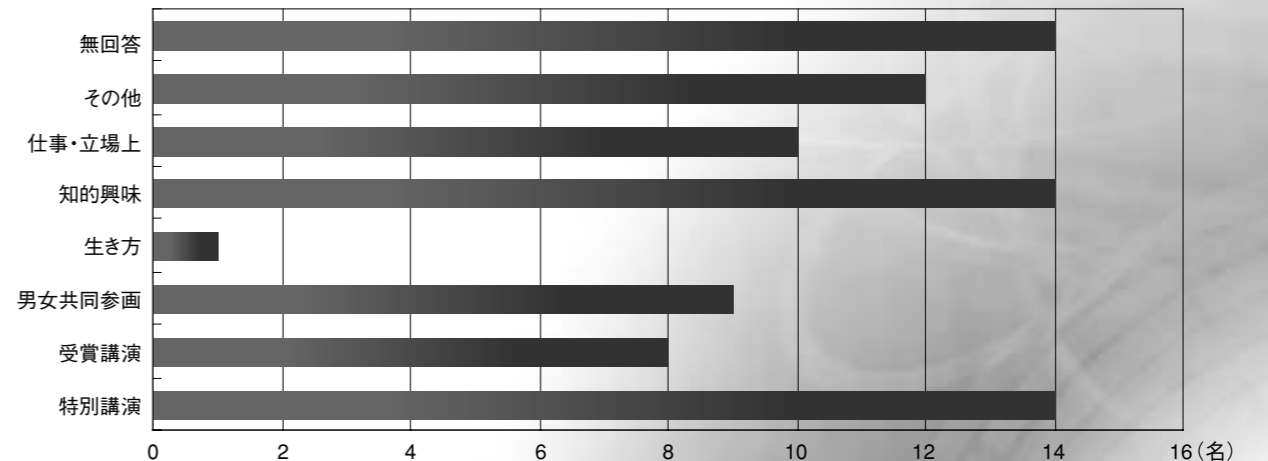
Q3 これまでに男女共同参画について何かご存知でしたか？



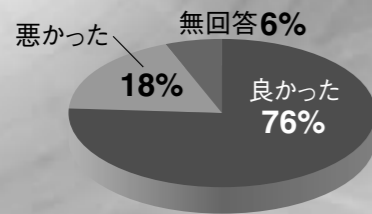
Q4 このシンポジウムのことをどこでお知りになりましたか。



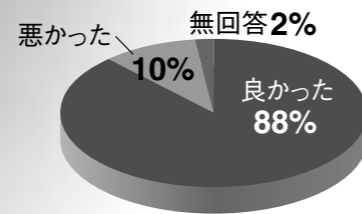
Q5 このシンポジウムに参加された動機は何ですか。



**Q6** 日時について<sup>注</sup>



**Q7** 場所について<sup>注</sup>

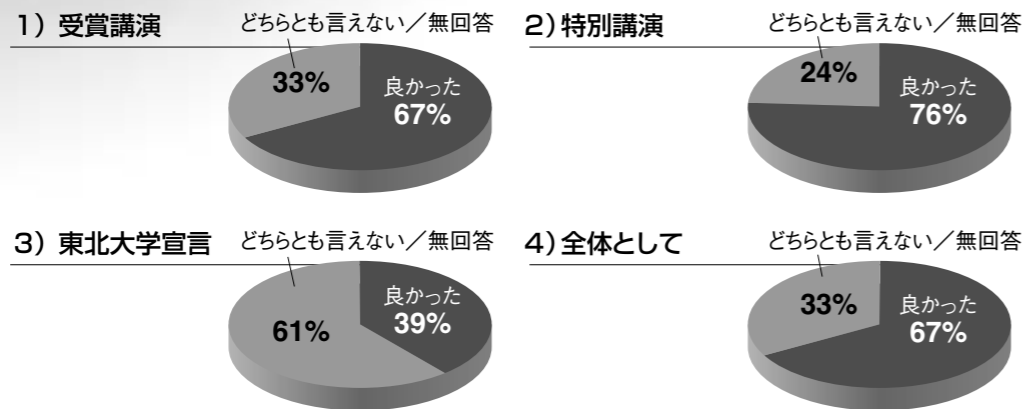


b(悪かった)とお答えの方にお聞きします。どのような日時が良いでしょうか。

- 土曜日の午前か午後
- 働いているものにとっては中途半端
- 一般市民の参加も求めているなら、普通の会社勤務の方が仕事を終えてから参加できる時間帯だともっとよかったかもしれない。
- 終了時間が少し早いと助かる。

注 参加できた人だけの回答である。

**Q8** 内容について



**Q9** 内容について、ご感想をお聞かせください。(いくつかの代表的な意見/大部分が特別講演に関連して)

- 人類学的特別講演がおもしろかった。また、男女共同参画への考え方に対する示唆になるのではないのでしょうか
- 特別講演については、学部1・2年生に聞いて欲しい内容でしたが、学生へのアピールが不足していたと思う。広報の方法の検討が必要であると思う。
- 「星陵地区における病児保育施設の運営」のこれからに期待します。プロジェクト部門特別賞の内容についてももう少し詳しく聞きたいと思いました。特別講演は大変楽しく聞かせていただきました。良かったです。
- ①受賞講演の病児保育施設の実践がとてもよかった。その実践がすばらしい。本日の三者に大きな力を与えたのではないのでしょうか。②特別講演が非常に大勢の男性参加者にとっても納得のいくものではなかったかと思えます。
- とても楽しませていただきました。講演では、性差が究極要因としてオスがメスを獲得する能力に関係している「もの」が多かったのですが、それ以外男女の役割に関係するものは多くないのか。また、人間はほかの動物に比べて男女の役割に関係するものが多いのか疑問に思いました。
- すべての講演それぞれ非常に興味深かったです。特に特別講演の長谷川先生による意思決定の場においては、女性ががんばって輩出すべきとの言葉には感銘をうけました。
- これだけ視点が多いと(たとえば生物学、経済学、法学)相互の理解が難しいが、このような様々な視点の議論は必要不可欠だと感じた。
- 自然科学分野と人文・社会科学分野との融合が必要な問題なのだと思いました。専門分野にとどまらずより連携をしていく必要がある。
- これからの課題も多く大変だと思いますが、意識の中ではわかっている現実との関わりでそれぞれの分野で頑張っている様子が伝わってきた。

**Q10** 男女共同参画推進に関連したシンポジウムで、何かご希望の企画がありましたらお書き下さい。

- 21世紀COEの研究成果の発表してほしい。
- 学内外から著名な研究者(自然科学、社会科学、人文科学)を進んで招待して講演してほしい。
- 性差医療に関するもの
- 女性雇用に関するもの、職業をもつ女性に関するものを希望。
- 性差別してもいいと思っている人の話も聞いてみたいです。
- 全国的に盛んに見られるジェンダーフリーの考えを取り入れた条例等について議論してもらいたい。
- 大学の中の制度との関わりでどうなのか。具体的研究との関わりで沢柳賞などますますの発展してほしい。
- 今回のように分野をまたいだ企画を望みます。
- 専門的な話を聞けるだけで勉強になります。できればまた「性」をテーマにしてほしいです。
- 多くの市民の方にも拡大してほしい。

**Q11** 東北大学における男女共同参画推進、または学問・教育におけるジェンダー問題についてのご意見をお聞かせ下さい。

- 子供を持つ研究者の支援体制が整っていないようです。せめて保育施設を充実するよう努力が必要と思われます。
- 具体化すること、学内で実際に活かすことができるまで継続して取り組んでいただけることを期待します。
- 授業等でジェンダーについて取りあげていることはよい取組みだと思っています。性教育、ジェンダー教育というのは高校までの段階で受けている人は偏りがあると思います。なるべくすべての学生がこの問題について考える機会を持つべきですね。
- 自治体において、条例が制定され具体的にどう実践していくかになっている。しかし、政策が進んでも労働分野での性差は不況により低滞している。法政策の研究を進めるということですが、民間での実現ができるような視点と性別役割分業が依然として変わらない現状打破にむけた提言・研究をすすめてほしい。また、市民により開かれるように。
- 社会は男女共同参画と平等がごちゃまぜになっている。この論点を整理するのを感じているのだが、誰に教育するのかポイントを絞って進めてほしい。
- 病院だけでなく東北大学全体にわたって病児保育を考えるべきでないか!
- バックラッシュへの対応
- ①女子学生を男子学生同様に教育研究において養成する点をもっと意識的に実践することを求めたい。②各部署に女性を抜擢し育てることも必要かと思えます。
- 沢柳賞についてはもっとマスコミにアピールすべきだ。私は今回のシンポジウムまでこのことを知らなかった。
- 大学内の雰囲気として、男女共同参画については発言しにくい(発言するとフェミニズム(ウーマンリブ)の戦士のように思われそうで、協調を大事にする日本の文化を考えるとそう思ってしまいます。)総長とか評議員の先生方がもっともっと積極的な発言をされて、大学として男女共同参画プロジェクトをあたりまえのものと受け入れられる環境を作って頂きたい。
- 男女共同参画がなにを目指すのか?平等というならば何を根拠にいうのか?男女が違うという趣旨の発表の中で、同じである論拠をアピールしてほしいなと思いました。東北大のセクハラ問題も議論してほしいです。
- 旧帝大の中で一番早く女子の入学を認めた大学にも関わらず、毎年セクハラ事件が起こる現状を考えるべきだ。
- とても勉強になりました。また聞きたいです。是非参加したいです。小学校現場に今日の話を持ち帰り、保健の授業の参考にさせていただきます。